

奥の田植歌

大森 志 郎

三月二十七日に江戸をたつた芭蕉は、四月の二十二日に須賀川について、相楽等躬の宅に七日泊つた。「奥の細道」に、

先、白河の関いかにこえつるやと問。長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うばゝれ、懷舊に腸を断て、はかばかしく思ひめぐらさず

風流のはじめや奥の田植歌

無下にこえんもさすがに、と語れば、脇第三とつゞけて三巻となしぬ。

とある。奥州に書き残した「信夫摺」に載つてをる詞書には

みちのくの名所／＼心におもひこめて、先関屋の跡なつかしきまゝに、ふるみちにかゝりて、いまのしら河も越えぬ。頓ていはせの郡にいたりて、乍単斎等躬子の芳扉を扣、彼陽関を出て故人に逢なるべし

風流のはじめや奥の田植歌

とあつて、曾良の「俳諧書留」に

岩瀬の郡すか川の駅に至れば乍単斎等躬子を尋て、かの陽関を出て故人に逢なるべし

と記してゐるのと、口吻を同じくする。奥の細道の文章は、後に修辭を整へたもので、信夫摺の方が初案であらう。

陽関を出て故人に逢つた心地がして一週間も逗留したものゝ、あるじ等躬の家は、さつきの忙しい最中であつた。偶然さつきの慌しさの折に宿ることになつたのか、それとも陸奥の田植を見せうとあらかじめ日取の打合せでもあつたのか、臆測は避けるが、芭蕉たちの着いたのは、翌々日は等躬の家の田植といふ二十二日である。

芭蕉の「奥の田植歌」の句は相楽家の田植を見て作つたものではない。この町に着いたその夜の、翁、等躬、曾良の三吟の発句である。相楽家は太庄屋であつたから、遠来の客の二人ぐらゐを泊めたところで、手ぜまといふことはないが、田植どきのいそがしさは格別で、大家となればその準備もまた大がかりである。明後日は田植といふ日にやつて来た風雅人たちは、快くむかへられはしたものゝ、御覽のとほりの有様でおもてなしもできかねますが、といふやうなことわりを受けたに違ひない。その夜の三吟の発句が、田植歌の句であるのは、その日の等躬宅の情景と無関係ではなさうである。さういふときにとびこんできた人たちの、主人に対する挨拶の意を含んでゐるのが感ぜられよう。

曾良の「俳諧書留」に、卯月廿三日

この日や田植の日也と、めなれぬことぶれを有て、まうけせられけるに

旅衣早苗に包食乞ん ソラ

とあり、「随行日記」には

一、廿四日 主ノ田植。昼過ヨリ可伸庵ニテ会有。会席そば切、袴
頑賞之。雷雨暮方止。

一、廿五日 主、物忌別火。

とある。大地主の田植といふ、目慣れぬこと触れに耳おどろかし、きびしい物忌みに目をみはつたさまが、うかゞはれる。

だが、採りあげようとする問題は、さうした句作の心境ではない。この句を裏づけてゐる情景、芭蕉はいつたい、どんな田植歌をきいたのか、といふことである。芭蕉をして「風流のはじめ」を感じしめたのは、いかなる田植風景であつたのかを考へてみようといふのである。

芭蕉はこのとき四十六歳。仮の住居を定むるにも、つねに都塵を避けて郊外閑静の地をえらび、片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまぬ人、この旅ではじめて田植といふものを見、生れてはじめて田植歌をきいたといふやうなことは、あらうはずがない。芭蕉の心を動かしたのは「田植歌といふもの」ではなくて「奥の田植歌」そのものであつた。それは、彼がこの齢まで見なれ聞きなれて来たのとはまるで違つた、目新しいものであつたはずである。さうでなければ「風流のはじめ」といふやうな心からの詠歎が生まれて来るわけではない。

この句の「風流」といふ美意識も問題となるが、會長は那須の高久で「蠶する姿に残る古代哉」といふ句を作つてゐる。「はじめ」とは始源であり、現在にあつては「古代」なすがたをもつ。歴史性を帯びて目の前に存するものである。元祿のはじめの「奥の田植歌」は、この漂泊の詩人の心を歴史に誘ふものであつたのである。

芭蕉は、四月の二十日、那須の殺生石を見て、湯本から山道を芦野に出て、西行にゆかりの遊行柳をたづねた。

田一枚植て立ち去る柳かな

といふ難解な句は、そこでの吟詠である。柳のもとを立去るのが西行にしても芭蕉自身にしても、田を植ゑてゐたのは、早乙女たちにちがひない。こゝは行政的にはまだ奥州ではないが、芭蕉はその日のうちに白河の関跡を尋ねて、小雨のなかを簾宿に泊り、あくる日、白河を通つて矢吹に宿り、その次の日、須賀川に着いたのである。

田植どきの那須・白河である。行く先々に早乙女のはなやかな田植歌が待つてゐたことであらう。このほかに、

西か東か先早苗にも風の音

五月乙女にしかた望んしのぶ摺

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

など、仙道筋での芭蕉の句には、田植にかゝはつたものが多い。

だが、「風流のはじめや」の句を作つた須賀川は、白河から七里、奥州もほんの入口である。奥州に足を入れて三日目、入口をちよつとのぞいただけで「奥の田植歌」もちと大仰な、と言へないことはあるまい。羽田空港から帝国ホテルについて、いきなり、日本の何とかは、とやり出す異郷の人を思ひうかべてみるがよい。それにもかゝらず、句として浮くことのなかつたのは、巨匠の手腕ではあるが、そのうらに、作者の印象の強烈さが裏打ちされてゐるからと言つてよいであらう。

「奥の田植歌」は、芭蕉の耳にそれほど強く焼きついた。詩人の思ひを芸術の始源に遊ばせるやうな、印象ぶかい田植歌はどんなものであつたのか。探つてみるねうちはありさうである。

二

芭蕉が奥の細道を行脚した元祿二年(二六九)から百二十年あまりたつた

文化十年(一八三)に、江戸幕府の微官であつた屋代弘賢が、編集してゐた「古今要覧」に諸国風俗の部を立て、その資料を蒐めるために、各地の知人に『風俗問状』を出した。質問項目を定め、全国に配布して民俗慣行を蒐めようといふ、大がかりな調査であつた。不幸にして、古今要覧そのものが完成しなかつたので、この「諸国風俗」も編集されずに終つたが、それに対する答書がぼつ／＼見つけ出されて、昭和十七年に活字になつた。

その活字本に「奥州白川風俗問状答」と名づけられてゐるのは、屋代弘賢の間に、白河藩士の駒井乗邨が答へた答書の自筆の控で、彼の老大な手記「鶯宿雜記」の中から発見されたものである。乗邨は藩主松平定信の命をうけて「白河風土記」の編集にもたづさはつた筆まめな人である。彼は弘賢の「風俗問状」をうけると、白河城下の荒物屋嘉兵衛・須賀川の安藤辰三郎・ほか数名の人たちに尋ねてこの答書を作つた。白河城下は西白河郡、須賀川は岩瀬郡で、南北についてゐるが、白河藩の領地は、一円領地とはなつてをらず、越後と奥州とに半分づゝわかれ、奥州では仙道筋(福島県中通り)に、幾ヶ村かづゝ、とび／＼に散つてゐた。ちようど芭蕉が踏んでいつた道筋である。

その乗邨の答書の控の、五月の条に、

此月田植につき何条の事候哉。さびらきさのぼり等何様候哉。田植歌に古風も候はゞ可被注下候。

といふ弘賢の問を載せて、次のやうに記してあり、たゞ一首ではあるがこの地方の田植歌が記録されてゐる。

郡中農家にては田植入梅之節、田植よしと申日に植初申候。尤其日は小豆飯・煮べ等にて祝ひ申候。是をさびらきと唱申候。植仕廻はさなぶりと申て、其日植仕舞の田の水口より苗を三かぶぬき、その

跡へ三株うへ替、初にぬきとり候三かぶは家へ持かへり、釜の神其外家内諸神へそなへ、其折もあづき飯、煮しめは大根、田作、いも、午房、いか、豆腐の類を肴にて、親類打寄酒たべ申候。是をさなぶり祝ひと申候。さのぼり・さなぶりは道音にておなじ事歟と存候。土俗国風のなまりにてさなぶりと申候事に可有之候。田うへうた、なひの中のうぐひすは、なにを／＼とさへづる。くらますとにかきそへてたわらつめ、弥十郎とさへづる。

とうたひ申候。尤うた数は多く有之趣に御座候へ共、いづれも歌の仕舞は弥十郎と留候也。夫ゆへ弥十郎ぶしと申候よし。芭蕉の「風流のはじめや奥の田うゑ唄」と詠じ候も、此歌を聞て、何となく吟じ出たる事に可有之候。

松平定信時代の白河・須賀川では、百二十年前に芭蕉さまもこの田植歌、すなはち弥十郎節を聞かれたのだ、と解釈してゐたのである。

残念なことに、たつた一首を挙げただけで、「尤うた数は多く有之趣に御座候へ共」と、はしよつてしまつて、その全貌は伝へてゐない。「有之趣に」といふ口吻は、報告者たちは、その田植歌をよく知つてはをらず、あまり関心をよせてゐなかつたことを示してゐる。かういふ答へ方は問状を發した弘賢にとつても遺憾なことであつたらうと思ふ。したがつて、それにつゞく「いづれも歌の仕舞は弥十郎と留候也」といふ記述にどれだけの信憑性があるのか、判断に迷はざるをえない。なぜなら、後に述べるやうに、田植歌といふものは、その歌詞のすべてが「弥十郎」で終るといふやうなことはありえないもので、もしも、この地方のこの時代の田植歌がすべて「弥十郎」で終つてゐたものならば、それは田植歌としてはずぬぶんと頽れた形であつて、その歌数もさう多くはなかつたらうと思つてよい。風俗問状の答書は、田植歌は昔も今も

変りはないといふ素朴な前提のもとに、芭蕉が聞いたのも今のこれであると信じて疑はないけれども、芭蕉の耳を驚かして「風流のはじめ」と歎ぜしめた田植歌は「弥十郎節」と言はれるほどに頼れたものではなかつたらうと思ふ。その程度の頼れたものなら、元禄時代には京でも江戸でも年ごとに聴かれたはずである。「奥の田植歌」は、もつと「古代」なものでなければなるまい。

全国的に田植歌が消え去つたのは、近代の農事改良に伴つて、正条植ゑや梓植ゑの普及したため、と言はれるが、消え去る前から田植歌は衰微の方向をたどつてゐた。衰へながらも明治までは全国各地で歌はれてゐた。

文部省の文芸委員会が全国から報告を求めて編集した「俚謡集」が出版されたのは、「風俗問状」が出されてからさらに百年たつた大正三年(一九一四)であるが、その福島県の条には白河郡や岩瀬郡の田植歌は一つも採録されてゐない。芭蕉のあるいた仙道筋では、その北につゞく安積郡がわづかに二首、安達郡が六首、信夫郡が二十四首と、北へゆくほど多いのは、あるいは偶然かも知れないが、南のものを文部省が採録できなかったとはいへる。「風俗問状」の答書に載つたものに近いのは、安積郡に

苗の中の鶯鳥は、なにを、なにと、さやづるや。お蔵米にとがきを添

へて、たはら積めとサー。オセ／＼／

とあるが、弥十郎といふ言葉は見えてゐない。その北の安達郡では

苗の中の鶯鳥は、何がなんと、さやづるや

と前半だけ採録されてをり、北の信夫郡には、安積郡によく似た形の伝承があつた。しかし信夫郡のには重複もあり、順序も乱れてゐる。

いづれにしても風俗問状から百年で、仙道南部の田植歌は見るかげも

なくやせ細つてゐる。同じやうに、風俗問状に先立つ百二十年、元禄時代の田植歌が、終りをすべて弥十郎で結ぶ「弥十郎ぶし」といふやうな形のものではなかつたであらうことは、推測するに難くはなさうである。

そのうへ、風俗問状の答書を書いた行政官が、田植歌といふものに興味がなく、採集らしい採集もせず報告をしてをるのであるから、定信時代にだつて、弥十郎節といひきれるほどに零落したものだけであつたかどうかは疑はしい。

三

屋代弘賢が風俗問状を發するより十五年前、寛政十年(一七九八)に、本居宣長の「玉かつま」の第九巻が上梓された。そのなかに『みちのくの田うゑ哥』といふ一節があつて、

陸奥の田植哥とて、書たるを、人の見せたる、

として、その全文を載せてゐる。たゞ、それを採録した地方も、採録した人も、本居に示した人の名も、いつさい不明である。採集者と提示者が同一人か別人かさへわからない。陸奥といつても広いことで、田植歌が地方地方によつてかなり違つてゐることは、本居ならずとも、この時代に気づいてゐた知識人は、多くはあるまいから、この田植歌を示した人も詳しい地名は知らなかつたのかも知れない。それにしても、提示した人の名が記してあつたらと、惜しまれてならない。

本居の門人はほとんど全国にわたつてゐるが、東北地方にはをらなかつた。鈴屋門人録に陸奥と記されたのはたゞ一人、それも陸奥松前の藩中とあるから、東北地方ではないし、その入門も、玉かつまのこの巻の

刊行より後である。伊勢の松坂まで東北地方の田植歌が運ばれたのが、どうした経路からであつたかは、かゝる、わからないが、弘賢の問状をうけた現地奥州のまめ人たちの報告に載らなかつたみちのくの田植歌を、ほゞ同じ時代に、幾山河をへだてた伊勢の国人が記録しておいてくれたのは、稀有なる学恩といふべきであらう。

たゞし、玉かつまの記載は、はじめから終りまで書き流してあつて、行かへはなく、段落も読点(、)だけで、歌のきれ目が示されてゐない。この全文が幾つの歌詞から成つてゐるのか、どこからどこまでが歌詞なのかは読者の判断、すなはち解釈となる。解釈が違へば、歌の数さへ違つて来るわけである。そして、歌詞でない部分、ふしをつけて唄ふのではない語も含まれてゐるやうに思はれる。書き流しの文章に段落をつけるだけのことが、こんなに厄介なこともあるのは、筆者には一つの経験であつたが、試みに、全文を解析して、分けて書いてみると、次のやうにならうか。なかでも⑩と番号を打つた歌の前にある「曲」といふ字には、迷はされた。段落の分け方も博雅の士の御指教を乞ひたい。

この、玉かつまに載せた田植歌の④が、風俗問状の答書に一つだけ載せてある白川地方の弥十郎節や、但謡集の安積郡のものと極めて近い関係にあることは、明らかである。厳密に言へば、これは苗取歌であつて、田植歌ではない。狭義の田植歌は、その次の「朝はか」から「上りはか」までであるが。

みちのくの田うゑ哥

陸奥の田植哥とて、書たるを、人の見せたる、

弥 十 郎

① あすは大たむのおたうゑだが しつたかしらぬか 太郎次郎

② からすの八番鳥に むく／＼むつくりと むくしり起 大くろ
小くろ 墨のくろ 上の町の一みなくち そろりそつと 引こ
んで はつし／＼とかくべいぞや

な へ と り

③ 種は千石 おろし申したが どれが葉広ハヒロはやわせ

おとりやれや 皆おしなべて 葉広はやわせ

④ 苗の中の鶯は 世をば何とさへづる

蔵クラマズ樹に十かきそへて おくら済むとさへづる

朝 は か

⑤ 朝はかの一みなくちに 生たる松は何まつ

白かねの鉋子提げに 田ぬしいはふ若松

若松の一の枝に とまる鷹が巢をかけて

巢のうちを見入て見れば こもち金が九ツ

一ツを宇賀にまゐらせ 八ツの長者といはゝれたよ

⑥ けふの田うゑの田ぬし殿には 金の白が七から

七からに八からまして立たは 長者殿にもますべし

⑦ 杵が十六 女が三十三人

三十三人の其中では どれが目につく旅人

紅の前だれに 上げ嶋田がめにつく 旅びと

昼 上 り

⑧ 日を見れば ひるまになり候 昼いひもちのおそさよ

⑨ 昼いひはいでき候が 椀を何具そろへた

百三具揃へた

⑩ 昼いひはいでき申したが おけくさになに／＼

いそやわかめ茹あげて たひをまねふくろから

曲

⑪ 鎌倉へのぼる道には をうなにてたる石あり

男よりて手だにかくれば なよれかゝる石あり

⑫ かまぐらの御所の館ヤカタは 二階作りの八ツむねに

むねさはしをふせて 二階づくりの八ツむね

⑬ 鎌倉の御所のやかたの 百千本の竹の子

百千本のたつなら 御所は名所となるべし

夕 暮

⑭ タぐれに出て見れば 前田わせがそよめく

そよめかばおかりやれや 百や廿餘人

⑮ 百廿餘人の其中に どれがこなたのムコ掣殿

紅の鉢巻に 左鎌が掣殿

上り は か

⑯ 上りはかのこんそめには 誰もけんてにかけけるな

玉のみこしでむかへ申そ 誰もけんてにかけけるな

⑰ 笠の上で蟬が鳴候 おいとま申ぞ田の神

このやうに分けると、

弥十郎 二 なへとり 二 朝はか 三 昼上り 三

曲 三 夕 暮 二 上りはか 二 (計 十七)

となる。数は多くないが、田植歌としては、これで首尾のととのつた一セットである。これだけで朝から夕まで一日の田植はできるのである。

爐辺叢書の「東石見田唄集」の編者が「一日の田植多には、いくらか唄の数は唄はない。十か二十あれば大抵は勝負がつくので、普通、声自慢の早乙女でも、實際唄はして見ると案外数は知つてゐないものだ」と言

つてゐるのは、参考にならう。

俚謡集にのせた仙道筋の田植歌をみると、この玉かつまの田植歌のなかの④、⑤、⑪の類歌が見出される。

④が安積・伊達・信夫の三郡にわたつてゐることは先に述べたが、信夫郡に

あさはかの いちみなくちに生えたる松は なにまつや。五葉の松に

一の枝に 子持つた鳥 やれ巢をかけ 巢の中をのぞいて見れば 中

にや 九つ 一つをばてんじよに上げて 八つで長者とひろめたや

とあるのは⑤に近いものであり、おなじく

鎌倉へのぼる道に 女に似たる石がある 男よりて手をかけ見れば

なよれかゝる きこえた

とあるのは⑪と対応する。

風俗問状と同じころに菅江真澄(文政十二年歿)が蒐めた「ひなのひとふし鄙廻一曲」に、仙台の田植歌として、

明日は大檀那のお田植だが知たしらぬか太郎次郎 からすの八番鳥に

むくくむつくりとむくぢりおきて 大黒小黒墨の黒 三十三疋引出

し 苗つけて参る

とあるのは①、②に近い。

さらに捜してゆけば、岩手県の正月の田植踊の歌などに⑤や⑦の類歌も見出されるが、一曲一曲を問題とするなら、全国にわたつて類歌が求められる。いかなる学問でも、系統論は、その文化形態の基本構造について樹てられるものであつて、部分と部分との比較は伝播論を成立させるにすぎない。乏しい資料から結論をひき出すことは慎しまねばならないが、その構造に注目するならば、玉かつまに載せた「みちのくの田うゑ哥」が、白河から仙台にいたる街道筋のものに極めて近いことは、

疑ないであらう。

白河の風俗問状の答書が書かれたのは、松平家が白河から桑名に移封になつた文政六年(二八三)以前であることは明らかであるから、遅く見ても玉かつまの上梓より二十五年のちにすぎない。ほど同じ時代にこのやうな筆録も残つてゐるのであるから「弥十郎ぶし」で片づけた風俗問状の答の方が少々お座なりで、粗漏であつたことは争へまい。

田植歌の系統や分布は、詳しくはまだ明らかにされてゐないが、今の福島県でも、海道筋や会津地方のものは、これらと異つた構造をもつてをり、それより北の諸地方のものも、また違つてゐるやうである。

芭蕉が踏んで行つた、白河の関から北の郡には、その百年のうちに、このやうな田植歌が残つてゐたとすると、「風流のはじめ」は、玉かつまに載せられた「陸奥の田うゑ哥」からうかゞふことができるといつてよささうである。

四

奥の細道の古註である「菅孤抄」は、奥州の田植歌は生仏という盲法師が作つたものだといふ言ひ伝へをとりあげてゐるが、これは机の上での思ひつきにすぎない。世に知られた人名と結びつけるのは、むかしの注釈家の悪い癖である。

芭蕉が奥の細道への旅で、珍らしげに田植に見とれるのに先だつこと六百六十六年のむかし、治安三年(二〇三)に、京都の土御門殿の土堀を崩して藤原道長が、そのむすめである上東門院のお目にかけた田植のありさまが、栄華物語に描かれてゐる。そのなかに、いとあやしききぬに破れたる日笠として、紐解きて足駄をはいて、歩み出て来る「田あるじと

いふ翁」がある。それが田植歌に太郎次とか太郎次郎とか呼ばれてゐるものゝ原形である。「太郎次」は「田あるじ」の訛と見られる。

玉かつまの田植歌に出て来る「弥十郎」は、東北の北の県の田植をどりの歌にも出て来る。菅江真澄の「ひなのひとふし鄙廻一曲」に、八戸の田植踊に「ヤン重郎が口上といふ」とあり、南部、糠部郡、田名部県の田植躍の唄を記した条には

正月十五日より廿日の頃まで、若き女、近き村より群来て諷ふ。弥武十郎。或、藤九郎といふが、男姿して、鳴子竿を杖と突立てうたふが此鳴子、扨にとりなし、田面するさまして辞

とある。但謡集の岩手県西磐井郡の、これも正月の田植踊歌にも

目出たやなく、目出たいとは鶴と亀、甲は兎の形にて、味噌様のご接待に摺り初めました。彼のやん十郎引連れしました、上の五月女三百人、下の五月女三百人、合せて五六百人の五月女ども、一時に植ゑると思つたれば、大殿様のお田をも難なく片晝間に植ゑ仕舞うて呉れたことちや程に、これよりおん若様のお化粧分とあつて、これも五六百刈りもあるさうだ

などある。東北地方の弥十郎は、栄華物語の京の「田あるじ」の翁のおもかけを伝へてゐるやうである。玉かつまの田植歌に、弥十郎と太郎次郎と双方が出て来るのは、むしろ稀な例である。「平家」を語つたといふ生仏より前には田植歌がなかつたかのやうな想像は滑稽でさへある。田植歌は田植とともに生れたはずのものである。

道長時代の京の田植をそのまゝに偲ばせるのは、今日も神社に伝つてゐる田植行事である。伊勢神宮や香取神宮の御田植は、特殊神事とよばれてゐるが、古代・中世の田植の形をほどそのまゝに保存して来たものであつて、古くは、全国どこでも田植はあのやうなものであつた。さう

したにぎやかな大田植が、つい近ごろまで中国山脈の谿あひの村々には行はれてをり、今も保存されてゐる。

栄華物語には田植歌は載せてはないが、

また田楽といひて、怪しきやうなる鼓、腰にゆひつけて、笛吹き、佐々

良と云ふものつき、さま／＼のまひして、あやしの男ども歌うたひ、

心よげにほこりて、十人ばかりあり

とある。田楽と田植歌はつきものである。その田楽を、言海などの辞書に「農人ノ耕作ノ勞ヲ慰メムガ為ニ、鼓、笛ニテ可笑シキ伎ヲ演ゼルモノ」と説いてゐるのは、目的と結果とをとりちがへ、本末を顛倒した説明といふべきである。

音楽も、演技も、歌謡も、田植のすべては、田の神にさへげた田の神のためのものである。田植はそのまゝ田の神の祭りであつて、朝はやく田の神の降臨を乞ひ、田の神の臨まれてをるあひだに、一日で完了すべきものであつた。田植歌はその根源において田の神の讃歌であり、それぞれの歌曲の歌はれる時刻と順序とがきまつてゐた。朝から夕まで、順を追うて展げられてゆく田植歌は、一つの連作であつて、玉かつまに載せた「陸奥の田うゑ哥」が、序曲・苗取り・朝はか・昼上り・曲・夕暮・上りはかの七部構成になつてをり、田の神への別れの挨拶をもつて終つてゐるのは、田植歌としての基本構造を保つてゐるのである。このやうにまとまつた、古い格式を維持した田植歌が、陸奥に残つてゐたといふことは、軽く見すごすわけにはゆかないのである。

中国地方の田植歌にも、玉かつまの陸奥の田植歌のなかにも、鎌倉をよんだ曲の一群が含まれてをる。それゆゑこれらの田植歌の成立は古くて鎌倉時代、おそらくは室町時代になつてゐらうといふ考は、何人の胸にもうかぶであらうし、誤ではあるまいけれども、この鎌倉上りが京

上りとなつてゐるものもあり、義経や源平の争ひを歌つてゐる地方もある。歌詞には時代による変化があつたと見られる。歌詞に変化はあつても、この構造の骨格は古代から伝へて来たまゝであることに疑はない。今日探訪される各地の田植歌は、その骨組みが崩れてばら／＼になつたものばかり、しかも、おほかたは、その残骸のほんの一部にすぎない。座敷唄に堕した今日の田植歌は、廢墟に散つてゐる残材にすぎないのである。

玉かつまにある田植歌は、俚謡集以下が採録した中国山脈に伝はるものに比べると、歌の数も少く、内容もかなり簡略になつてゐるが、断片化する一步手前で、鈴屋のあるじの囊中のもとなつたのは、まことに幸であつた。

五

田植歌とは苗とりから上りはかまで、暁から日没まで、順をもつて歌はれる歌謡の一群を指した言葉である。その全曲のなかの一ふし二ふしをとりあげて田植歌とよぶのは、木を指して森といひ、塊を挙げて山といふに類してゐる。芭蕉をして「風流のはじめ」をば感じさせた田植歌は、今日普通に考へられるような、断片化した一ふし二ふしではなかつたであらう。

かうして、玉かつまに記録されるより百年前、元祿のはじめに芭蕉がたづねたころの奥州には、朝はかから田の神上げまで順序正しく整つた田植歌が唄はれてゐたことが推定される。御田植神事や中国山脈に残つたような古風な田植をしてゐたからこそ、さういふ古格な田植歌が歌はれてゐたのである。それは、関東でなら、香取神宮の御田植祭などで

なければ見られないような、日本の中心部ではとうに失はれてしまつたものであつた。それを豫期してか、豫期せずにか、芭蕉はひとあし奥州の地を踏んで、その古風で敬虔な、にぎやかで大がかりな田植を目撃して、いはゞ芸能の起源に思ひをはせざるをえなかつた。歴史的なるものへの感動である。そこにあの名吟が生まれたものと考へる。

會良の俳諧書留に「この日や田植の日也とめなれぬことぶれ有て」といふのは、村の行事としての「大旦那のお田植」であつたことを示してをり、同じく會良の随行日記に、相楽家の田植の翌日に、「主、物忌別火」と記してあるのは「さのぼり」といふ神ごとの古い姿をしのばせるものであらう。この地方の農村では、今でも、農休みの日をカミゴトと言つてゐる。部落そろつての休日はカミゴトであり、カミゴトは農休みの日といふだけの意味に転じてゐるが、さういふ言葉を伝へてゐるのは、農事と神事との密接した前の時代があつたからである。

玉かつまの田植歌は断片化する寸前に記録された。田植歌がきれ／＼になつたのは、田植の方式が変り、農事の構造が変化したためである。田植は古来のまゝで行はれてゐるのに、田植歌だけが崩壊するといことはありえないし、田植歌だけが歌ひつがれて、大田植の行事が消えてしまふといふことも起るものではない。勤労の歌は勤労の様式と盛衰を共にする。大田植が衰へ、田植歌がきれ／＼になつたのは、農村が中世的な構造から近世的な構造に変化したためである。その近世農村への脱皮は、交通のはげしい土地ほど早かつた。近畿から関東にかけて、それまで芭蕉が住んで来た地方は、そのようないはゞ表座敷であつた。さらに北の、奥座敷へ踏みこんで、芭蕉ははじめて、中世的な農村の農作業に接したのである。

苗とり歌から神あげまで揃つた一連の田植歌が十八世紀の末に記録さ

れてゐることは、そのまへの十七世紀のこの地方には、きびしい物忌みを伴つた、古風な大田植が行はれてゐたことを證明して十分である。

會良の随行日記や書留の記事は、玉かつまの収録とともに、日本の農耕史料として貴重である。

芭蕉の目にふれたのは、古式な大田植そのものであつて、早乙女の田植歌だけを耳にしたのではなかつた。その田植歌は朝はから夕暮まで順序だてゝ歌はれる一連の田の神讃歌であつて、きれ／＼になつた「弥十郎節」の一ふしや二ふしではなかつた。巨匠の句が「田植歌」に焦点を合はせた表現をもつてゐるのは、情景を具象化するための技巧であつて、風流は花やかな大田植そのものにあつたことを思ふのである。

(人間の作つたロケットが月に突きささつた朝)